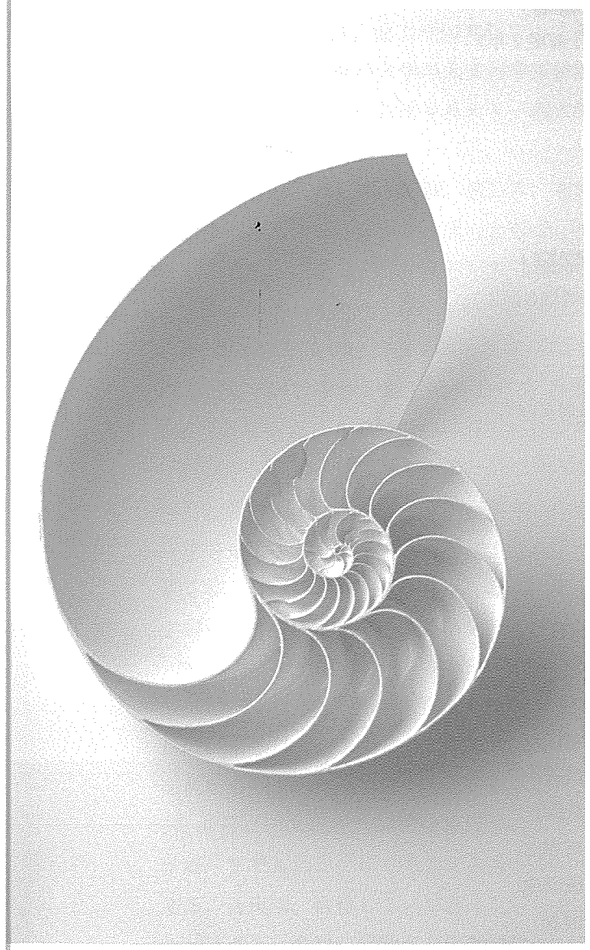
発 行

2018年10月27日
神戸大学文学部同窓会
文窓会
http://www.kobe-u.biz/bunsokai/（文窓会）
http://www.lit.kobe-u.ac.jp/（神戸大学文学部）

第12回

文窓賞優秀作品集



2018年10月発行

文窓会
神戸大学文学部同窓会

第12回　文窓賞
学生レポートコンクール 入賞作品

優秀賞

「愚かで奇怪な蝙蝠」
瀧井 建仁（社会学博士前期２年）

佳 作

「フィリピン留学記」
辻 啓人（フランス文学専修５回生）

「「書く」ことについて」
成田 まお（社会学専修２回生）

◎ 選考会　2018年8月9日
◎ 選考委員
西川 京子（審査委員長）
奥村　弘 学部長（日本史学教授）
鈴木 義和 副学部長（国文学教授）
白鳥 義彦 副学部長（社会学教授）
武藤 美也子　日高 健一　三宅 征彦
田中 賢司　廣野 幸夫　吉田 浩次
坂本 直樹　河島 真　津田 薫

優秀賞

愚かで奇怪な蝙蝠

瀧井　建仁（社会学博士前期２年）

2016年8月10日、他大学図書館での文献複写を頼んだ論文を神戸大学の人文科学図書館で受け取ったとき、その封筒を見ると一橋大学からのものだった。

このときの私の驚き、感慨、悲しみ、を記しておかなければいけない、と思ったので、今こうして書いている。どうしてそんな「些細なこと」が私にとって大きな意味を持ったのか。

「一橋大学アウティング事件」[*1]について公になったのは、事件が起こった翌年の2016年8月5日だった。大学側の経緯説明拒否を受けて遺族が民事訴訟を起こし、第一回口頭弁論の後に記者会見を行った。そうして事件の存在は各メディアで報道され、ＳＮＳでもシェア・拡散され、「ＬＧＢＴ界隈」の多くの人に広まりながら、人々に衝撃を与え動揺させていた。

一橋大学ロースクールの男子学生Ａ氏は、2015年4月に同級生の男子に恋愛感情を告白した。相手は「付き合うことはできないけど、これからもよき友達でいて欲しい」と返答したが、6月に、Ａ氏を含む同級生たちのＬＩＮＥグループでＡ氏がゲイであることを明かしてしまう。Ａ氏は、信頼していた友人にばらされたショックと、今後の周囲からの扱いについての不安から、心身に不調をきたし、授業などで同級生と顔を合わせると動機・吐き気やパニック発作が生じるようになる。彼は不安神経症・抑うつ状態と診断されつつも、教授やハラスメント相談室に相談していたが、アウティングの問題性が理解されないまま[*2]、クラス替えなどの措置は取られず、8月24日、Ａ氏は授業を途中で抜け、校舎6階から落ちて死亡した[*3]。

日常的な嫌悪・差別を見聞きするなかで「疑惑」をかけられないよう〈風向き〉を読もうとしながら、カミングアウトという「賭け」、そしてアウティングのリスクという「綱渡り」を生きている性的マイノリティにとって、アウティングとそれに付随した死は、全く想像だにしないほどの珍しさということでもない。仲間の自殺率の高さを体感し、また死に至るまでではなくとも、アウティングによりその学校・職場に居づらくなる／居られなくなるといった話を聞く（或いは自身で経験する）ことは普通だった。それでもこの事件が人々に衝撃を与えたのは、事件が起きた場が一橋大学（しかもロースクール）であったということが大きいだろう。「名門」とも言われる大学の、法という、「人権」を根本に据える（と私は信じている）領域の組織で、まさか、と。私も、報道を目にしたときにはショックを受けた。しかし、悲しみなど具体的な感情は生じてこなかった。冒頭の瞬間までは。

それはまずは偶然への驚きだった。そして、Ａ氏と私のつながりが感じられた気がして、感慨深く、また、思い出すかのように悲しかった。

こうして「やっていけている」私も、いざ何かが起こったとき、（周囲の友人はともかく）大学組織は何かしてくれるだろうか、学内相談室は実際にどれほど機能するだろうか。そう考えると、私も他人事ではない、と実感した。勿

論、彼ら[*4]「当事者」は「無力な存在」ではない。しかし、その主張は実際には何を言えているのだろうか。無力ではない？んなこたあ分かっているのだ。彼らは自由が利く範囲で何とかやっていこうとして、実際にやっていけている（そうでなければ死ぬだけだ）。しかし例えば、死んだA氏はいつの時点まで「やっていけていた」のだろうか。私はいつまでどのように「やっていける」のだろうか。この問いの前で、「当事者は無力な存在ではない」という文言はほとんど意味がない。

どうして彼は生き延び・生き続けなかったのか、どうして私は生き延び・生き続けることができているのか。彼が弱く、私が強いからか。彼がマイノリティ性をより多く持っていて、私にはマジョリティ性がより多いからか。彼はアウティングされ、私はされていないからか。彼が生きるための何かしらの術を持って（与えられて）おらず、私は持っているからか。或いは、彼は運が悪く、私は運が良いからか。

「死ぬわ、死ぬわ、倒れるわ、まあ、私の周りの友人はひどいことになっている。そのたびに思う。私はもはや、たまたま運よく生きている側の人間だ、ということだ。」「私は、今、気が滅入っている。なんでそんなことになっているかと言えば、周りの友人たちが、バッタバッタと死んでいるからである。」「『死』を呪っているのではない。『運』という、不思議なものを見すぎたからである。」「そのすべてを『運』の一言で片づけていいものなのか？自分が、運よく生きているだけに、繰り返し考えてしまうのである。そしてまた、気が滅入るのである。」（野田 2015: 310-312）

気が滅入るなかで思い出したのは、野獣（ノケモノ）としての己の毛皮の存在である。両性愛者（バイセクシュアル）が「蝙蝠」と呼ばれることはあるが、私は一方では「普通の人」たる異性愛者のふりをし、一方では両性愛者のふりをしている。強調しておくが、これは私が「異性愛者でない」／「両性愛者でない」ということとは関係が無い。「私が（本当は）何である／何でないか」は問題ではないのだ。私はただ、両性愛者や異性愛者というカテゴリーに距離を感じながらも、翼を広げたり、地を走り毛皮を泥で汚したりしている[*5]。両性愛者と異性愛者とを行き来する蝙蝠は、女性とも男性とも性的関係を持つとか、同性愛者と異性愛者とを行き来するといったふうにイメージされる「両性愛者の蝙蝠」よりもさらに「質が悪い」かもしれない。同性愛者の「こっちの世界」で楽しみつつも、「ノンケの世界」では異性愛者として振る舞うことが（同性愛者よりも容易に）できて、結局は異性婚に「落ち着いて」しまえる、そういう両性愛者という存在を、疎ましく思う気持ちは私も何となく分かる。そこに加えて、「異性愛者にもなります」とは、混乱すること必至。或いは、自身の同性愛要素を認めるかどうかという点に焦点化され、そこを迷っている状態と解釈されたり、変なパーセンテージ・グラフやスペクトラムの直線を持って来られて「異性愛者寄りの両性愛者」として位置づけられてしまうかもしれない。

何にせよ、「世間」にとって「蝙蝠」がよく分からない存在だということには違いない。だからこそ、「卑怯な蝙蝠」は獣になったり鳥になったりして難を逃れることができたのだが、そこに賢さを見出すのであれば、逆にどちらの世界でも「異者」として振る舞うことに愚かさを見出すこともできよう。

> 「異性を好きになることもある」と後出しで説明するんだったら、最初から「異性愛者」という大カテゴリーの中にいることを述べたほうが賢明なのではないか。わざわざ、変態と同じカテゴリーに自らを分類したがる人たちがいるのは実に奇怪だ。意固地になって露悪的な態度にこだわる自由もあるが、それに対して批判が浴びせられるのも自然なことかと。[*6]

こうした「アドバイス」は、「愚かな」カムアウトの仕方をしたマイノリティに対して繰り返し言われてきた。カテゴリーに関する偏見によって特定の表明方法が「賢明」になっている現状において、変革すべきは偏見のほうであって、「賢明」な表明をしないマイノリティの態度・振る舞いではないはずだ。そうした「賢明さ」に（＝「賢明さ」を規定する差別的知識・規範に）抵抗せんとして、「愚か」にもスティグマ・カテゴリーを自分からその身に引き受ける「奇怪」（queer）な人に私は敬意を抱く。差別されるカテゴリーをわざわざ引き受ける「愚かさ」、「奇怪さ」。それがどれほどの労か。「その人は恵まれているから贅沢にも愚かに振舞えるのだ。」確かにそうかもしれない。しかし、賢者が鳥になりすまし、獣にしかなれない愚者が死んでゆくならば、せめて恵まれている者が愚者にならなければ、一体、獣は獣としてどうやって生きてゆけるというのか？「当事者は無力ではない。」「彼らは彼らの世界でやっていけている。」もうたくさんだ。もうたくさんだ。あまりにも死にすぎている。

A氏はアウティングされるリスクを最小限にしたければ、「告白」などすべきではなかった、という声もある。確かにそのほうが「賢かった」のかもしれない。

どうして彼は生き延び・生き続けなかったのか、どうして私は生き延び・生き続けることができているのか。彼が愚かで、私が賢いからか。彼はいつの時点まで「やっていけていた」のだろうか。私はいつまでどのように「やっていける」のだろうか。

野田秀樹の演劇「エッグ」においては、挿入歌「別れ」が何度も歌われる。

> あなたには一瞬の別れでしょうけど
> 私には永遠のさよなら[*7]

劇中において女は一度目は、ふられた失恋の別れとして歌い、二度目は、想い人の自殺という報を受け、遺された者として「死別」を歌う。

遺された者として、「彼は私だ」[*8]なんて私には言えない。私は一瞬の（或いは一瞬かつ永遠の）別れを経験していないのだ。だが、「彼は私ではない」からこそ、私は彼とは別様の「愚かさ」を振舞えるのではないか。「奇怪」と思われながら。

「愚かで奇怪な蝙蝠」は今も様々な名前で呼びかけられながら往来している。

註

*1）アウティングとは、性的マイノリティの人の性的指向やジェンダーアイデンティティなどについて本人の許可なく第三者に暴露することをいう。この事件に関しては、弁護士ドットコムの記事（https://www.bengo4.com/internet/n_4974/）や、Buzz Feed の記事（https://www.buzzfeed.com/jp/kazukiwatanabe/gay-student-sued-hitotsubashi-university、https://www.buzzfeed.com/jp/kazukiwatanabe/family-told-about-their-son-and-hitotsubashi-lawschool、https://www.buzzfeed.com/jp/kazukiwatanabe/hitotsubashi-outing-this-is-how-it-happened）が詳細を報じている。以降の事件概要の記述に際しても、それらを参照している。なお、大学との訴訟は2018年現在も続いているが、アウティングした個人と遺族とは和解成立済みである（http://www.nanmori-law.jp/news/257）。

*2）大学側の対応の不適切さについては、裁判経

過報告会（2018年7月16日）の配布資料（http://www.nanmori-law.jp/cms/wp-content/uploads/2018/07/180716documents.pdf）、報告会のリポート記事（http://fairs-fair.org/outing_20180716/）を参照のこと。

*3）A氏の死については、各メディアによって、各書き手によって、「自殺／自死」とも「転落死」とも書かれている。落ちる直前に目撃されたのは彼がベランダの縁に手を掛けぶら下がっている状態であり、パニック発作や呑んでいた薬の影響と見なし「転落死」とする人もいれば、「自殺／自死（企図）」とする人もいる。遺族は「自殺／自死」という言葉を（少なくともメディアの報道上では）使っていない。A氏が意図して死んだのかどうかという問いは、きっと意味があるのだろう。能動か受動かという区別に意味があるからこそ「流されるな、流れろ」といったフレイズが惹句として独特の意味を持つ。（川崎昌平，2017，『流されるな、流れろ！：ありのまま生きるための「荘子」の言葉』洋泉社.）一方で、かつて、ギリシア語・ラテン語などでは、「死ぬ」というのは能動でも受動でもない「中動態」でしか表されない動詞であったという。そこでは主語の「意志」は問題にならない（國分2017）。しかし、今回のA氏の死を「中動態」で書けたとしても、死へと追い込まれた一連の経緯を軽視することになるのではないだろうか。今回の「死なされた」A氏の死を、「転落死」と呼ぼうが「自殺／自死」と呼ぼうが、事件の悲惨さや大学の対応の問題性が変わるわけではないだろう。それでも、A氏の死を書くとき、（人類学者や社会調査者だけでなく、あらゆる書き手が、）他者を「書く」ときの問題を考えなければならない。

*4）いま現代の語法として「彼ら」と書くことで男性中心主義をなぞることになるのかもしれない。男性でも女性でもない性別というものがある以上、「彼ら、彼女ら、或いはその呼称に留まらない人々」と書くほうが良いかもしれない。しかし、そうすると、社会の至る所で性別が人々を分けている（分類し、分かった気にさせている）状況をなぞることになるのかもしれない。そんなことを考えながら私は「彼ら」という言葉で（書ききれないと知りつつ）書く。

*5）「鳥」になりすますのは難しくない。異性愛者になるという選択を、社会はそれはそれは易々と受け入れてくれるだろう。いや、それは選択肢というよりも、何もせずにいれば異性愛者と見なされるのだ。

*6）筆者が受け取った言葉。引用元の文献があるわけではない。

*7）（野田2015: 42）

*8）例えば（砂川2018: 131-132）。

参照・引用文献

國分功一郎，2017，『中動態の世界：意志と責任の考古学』医学書院.

砂川秀樹，2018，『カミングアウト』朝日新聞出版.

野田秀樹，2015，『エッグ／ＭＩＷＡ　21世紀から20世紀を覗く戯曲集』新潮社.

佳　作

フィリピン留学記

辻　啓人（フランス文学専修５回生）

私の自室の勉強机は壁に面するように置かれていて、その壁には大きなコルクボードが吊ってある。机に向かうと、やるべきことのリストや一枚だけ使った証明写真の余り、新聞の切り抜き、いつか観た映画チケットの半券などが所狭しとピンで固定されているのが視界に入る。そのボードの左下にはブレスレットがひとつ掛かっている。平面的なものばかりが雑多に留められているボード上でこの装飾品は文字通りすこし浮いている。これは春休みに留学していたフィリピンから帰国するとき、現地の先生に餞別としてもらったものだ。

フィリピンに英語留学をしていたと言うと、どうして北米やヨーロッパ等の英語圏に行かなかったのか、と訊かれることが多い。しかし、フィリピン政府は公用語としてタガログ語と英語を指定していて、英語教育がかなり進んでいる。また、マンツーマンレッスンが一日に４コマあったので話す機会がとにかく多く、スピーキング能力をなんとかしたい私にはぴったりだった。さらに、韓国資本の学校を選んだため日本人は私含め三人しかおらず、何をするにも英語を話すしかない状況も、英語力の向上におおいに貢献してくれた。そしてなにより、ほかの英語圏の国々と比較するとかかる費用が段違いなのだ。正直、お金にゆとりのない私にはありがたかった。

そういう理由でフィリピンに来てまだ間もないころ、フィルという同年代の先生に週末のバギオ旅行に誘われた。フィリピンの軽井沢とも称される避暑地である。バギオへの移動手段や宿の手配は3500ペソで先生がすべて済ませてくれるそうで、すでに韓国人が５人参加を決めていた。ちなみに私の滞在時のレートは１ペソおよそ２円である。

その時点で私の滞在期間はまだ三週間も残っていたが、渡航前に必死に貯めたお金は授業料に消えてしまい、所持金は5000ペソだけだった。バギオで遊ぶ予算なども勘案すると、旅行明けには１ペソも残らないのではないか。しかし、語学学校に併設された寮から一歩も出なくても寝食には困らないので、旅行後にまったくお金を使わず過ごすことも可能だ。それに、旅行中ずっと英語を話すことになるなら、寮にこもって勉強しているよりも会話の練習になりそうだ。逡巡のさなか、二年次に携わっていた留学生のチューター活動を思い出した。オックスフォード大学から来た彼らは国籍もさまざまだった。当初は彼らと私に共通の話題などあるのだろうかと心配していたが、神社やお祭り、居酒屋などいろいろな場所に行くうちに打ち解け、あっという間に親しくなった。まだ顔見知りの韓国人やフィルとも一緒に遊びに行けばより仲良くなれるかもしれない。こうして私は、せっかくの機会なのだからと旅行に参加することを決めた。

バギオまではフィルの車で数時間かかった。参加人数はフィルと彼の家族と私と韓国人の友人ら、計10人という大所帯だ。到着すると、宿泊するアパートに荷物を置いて、さっそく遊びに出かけた。フィルはもちろんのこと、友人らも既に一年ほどフィリピンに滞在しているので英語が上手く、私は会話においていかれないように必死だったが、それも却って刺激的だった。

特に印象に残っているのはナイトマーケットだ。大通りで露天商が靴や洋服を売っていて、現地の人でごった返していた。私ははぐれないように友人の背中にぴったりくっついていたが、皆は悠々と商品の値段を訊いたり、模造品か本物かを確かめたり、挙句、値切ったりしていた。混雑した通りを抜けると開けた広場に出た。そこでは食べ物の屋台が並んでいた。たこ焼きや串カツといった日本語の看板を掲げたものや、小鳥の丸焼きなどが売られている。フィルは言った。

「バルートを食べてみない？」

アヒルの有精卵を孵化直前に茹でた、フィリピンの郷土料理だ。私は食べたことがなかったが、残り少ない現金を得体のしれないものに使いたくなかったので断っていると、フィルは奢るから食べろと言う。どうやら日本人のバルートへの反応を見たいらしかった。

卵の頂部に穴をあけると透明な液体がこぼれてきた。飲んでみると薄いチキンスープのような風味。殻を剥いていくと固形部はおおまかに黄、黒、白の三色に分離している。黄色い部分は加熱しすぎたゆで卵そのものだ。黒い部分はヒナの顔らしきものが見て取れたので目を閉じて口に運ぶと、レバーに近い味がした。白い部分は無味で、消しゴムでも食べているのかと感じた。

見た目ほど悪くはなかった、と私はフィルに言った。もう食べないだろうな、とも思ったが。このように学校の敷地内に籠っていては体験できないフィリピンらしさを肌で感じた旅行だった。

ところが、寮に帰ってから、語学学校の数少ない日本人らに「3500ペソはありえない」と言われた。一人は友人とバギオに行ったとき2000ペソで豪遊できたと語り、もう一人は先生のアテンドする旅行はたいていがぼったくりであると話した。

「フィリピンの先生の時給知ってます？ 120ペソですよ。スタバ行くのも必死なんですよ」

「別にその先生が悪い人とかじゃなくて、それが当たり前になっちゃってるんですよね。先生の副業みたいなもんですよ」

友人はそう言い捨てながらどこか憐れむようでもあった。貧困が人の心を貧しくする、と思っているのかもしれなかった。

少し調べてみると英語学校の先生でも120ペソをもらえるのはかなり良いほうで、時給を60～100ペソとしているところもあった。先生の待遇が悪いというわけではなく、たとえばマクドナルドの時給は42ペソだという。また、私自身はスターバックスにはあまり行かないが、メニューにはナントカフラペチーノが200ペソと書いてあった。彼らはマクドナルドで5時間働いてようやくスタバに行けるのだ。日本の最低賃金は時給約1000円だ。私たちは5000円のコーヒーをどんな気持ちで飲むだろう。その高級カフェに日常的に通うことのできる富裕層をどのような眼で見つめるだろうか。そしてここフィリピンでは、私はその富裕層の構成員なのだった。

私は家庭教師のアルバイトをしていて、時給を2000円もらっている。何かを教えるという点ではフィリピンの英語教師と同じ職種についていると言っていい。もちろん、彼らは教育のプロとしての課程を終えているため、一学生である私とは比べるのも失礼なほど専門的な職を手にしている。それでも時給は私の十分の一だ。フィリピンで生きていくには充分な給料だとは思う。私が彼らに払うべき対価として適正であるかどうかは、分からない。

フィルにとって、給料まるまる五日分を使わなければ行けないバギオ。そこは、日本人学生にとっては、学業の片手間のアルバイトで行ける場所だった。さらに言うと、ほかの韓国人は一年間フィリピンに滞在しているので、学費だけでも数百万円という気の遠くなるような大金が動いている。彼らの所持金は私の比ではなかったし、それはフィルも分かっていただろう。そう考えるとやはり、学生たちの払った3500ペソには、フィルの旅費は当然として、彼の家族の滞在費までも含まれていたのかもしれない。

けれど、私は彼の心が別段貧しいとは思わない。3500ペソという大金をたやすく払える人々を前にして、そこにどうやって罪悪感を覚えることができるだろうか。むしろそうしなければ我々は、たとえどれほど仲の良い友人であっても一緒に旅行にさえ行けないのだ。フィルはバギオを案内してくれた。私たちはバギオ旅行をたしかに楽しんだ。需要と供給が一致しているなら、そこに多少の誤魔化しが混ざっていようと重大な問題ではない。フェアではないと思うだろうか？私もそう思う。残りの滞在期間をほぼ所持金なしで過ごすことになったのだから。奨学金で大学に通っている私には、フィルには一生かけても返せないほどの借金もある。私は「裕福な」日本の人ではなく、「裕福な日本」の人でしかない。割り切れない気持ちもある。しかしそれなら、そもそも時給200円で英語を教えてもらっている時点でフェアかどうかを議論すべきだったのだ。お金を余分にとられたのは確かで、けれど私には被害者面をする権利もなかった。

どうして一緒に遊ぶこと、一緒に食事をとること、一緒にお酒を飲むことが仲良くなるための最善策だと無邪気に信じていられたのだろう。どうして、一緒にそうすることすら叶わない人たちの存在に気づかなかったのか。いままで自分の考えていた国際交流がいかに狭義なものだったか、私はようやく思い知った。あれはただの欧米先進諸国との交流でしかなかった。それも、大学に通えるくらいの教育を受けていて、日本に留学できる程度に裕福な学生との交流。そんな極度に限定された関係のことを国際交流だと考えていた自分を恥じた。

日本に暮らしているせいですっかり頭から抜け落ちていたが、旅行など本来金持ちの道楽なのだ。新興国に出向いて安く英語の勉強をすること、そこで観光を楽しむことは、経済を回すという観点から見れば文句なしに良い行為であろう。だが、私は何も考えずに、現地の人が利用するナイトマーケットで、安い衣服や食べ物にただ浮かれていた。破格で英語留学ができるということが何を意味しているのかを分かっていなかった。自分がこの地でどんな存在であり、どのような感情を周囲に抱かせうるのかに思い至らなかった。ただ諸手を挙げて物価の安さを喜んでいては、そこに潜んでいる問題に気づかず、軋轢が生まれるばかりである。私は現地の人々の生活に無理やり割り込んで、それを消費していたのではないか。私がここでしていたのは国際交流などではなく、単なる搾取ではなかったか。

別のある先生は、グループクラスで生徒がスイスに行ってみたいと話したとき、

「スイス美しいよね。スイスに住みたいけれど死ぬまで無理だからスイスの本を持っていて、ときどき眺めるんだ」

と写真集を見せてくれた。アルプスの山々と草原が広がっていて、そのときはただ綺麗だなぁとしか感じなかった。今は、いつかスイスに住めるといいね、きっと夢はかなうよ、などと言わなくてよかったと思う。フィリピン人の彼が英語ネイティブだらけのヨーロッパで英語教師をするのは不可能だろうし、移住のためのお金を貯めるどころか、おそらく旅行さえも、あまりにハードルが高すぎる。彼らが日本に生まれていたら、そして日本で英語の教師をしていたら、などと考えるのは無意味だが、そう思わずにはいられなかった。生まれた国が裕福か貧困

かでこんなにも生き方に違いが出る。どれほど努力しようとも、あるいは埋められないほどの溝がそこにはある。

日本に帰る日、フィルは私の部屋にやってきて、渡したいものがある、気に入ってくれるといいんだけど、とブレスレットを取り出した。私は、自分が普段から装飾品はおろか腕時計さえも身に着けていないことには触れず、礼を言った。彼は、日本に帰ってからも連絡してほしい、と続けた。忘れないで、とも言った。

忘れることはないだろう。けれどこの関係を友情と呼ぶことも、私にはきっとできない。

経済状況が極端に違う相手とも親しくなれるだろうか？立場の大きく異なる誰かと、本当に交流することができるのだろうか？私たちはどうすれば友達になれたのだろう？ブレスレットは何も答えないから、私はまだ考えつづけている。

佳　作

「書く」ことについて

成田　まお（社会学専修２回生）

何かを書く、という行為が昔から好きだったのは、言葉で自分の世界を作り上げることができたからだと思う。書かれた言葉は、文字を知らない人が見ればただの線のカタマリであり、無意味な記号である。しかし一度その言葉を獲得すると、それは各々固有の意味と歴史を持ち、十重二十重にその輪を広げていく。言葉と言葉が繋がり、もっと広く、もっと深く、自分の世界が豊かになっていく。だから私は言葉を知ることが好きになり、言葉そのものが好きになり、年を経るごとにますます「書く」ことにのめり込むようになっていった。

入学して早一年と少し経ち、今さらながら気がついたのは、文学部では特に「書く」機会が多いということだ。毎クォーター末のレポートやテスト、学部生全員に義務づけられた卒業論文。文窓賞もその一部かもしれない。部活やサークルで、または個人的に、種々の執筆活動に勤しむ人も多いだろう。かくいう私もそうした同好会の一つに所属しており、様々な作品を書くことを趣味としている。

「書く」ということ。それは私にとって、単なる情報伝達方式のひとつではなく、人間として生きるために必要不可欠な行為として存在している。

著書『職業としての小説家』の中で、村上春樹は「物語を語るというのは、言い換えれば、意識の下部に自ら下っていくことです。……作家はその地下の暗闇の中から自分に必要なものを――つまり小説にとって必要な養分です――見つけ、それを手に意識の上部領域へ戻ってきます」と書いている。彼とまったく同じであると言いきることなど畏れ多く、また本質的に不可能であるのは理解しているが、その感覚がわかるような気も確かにするのだ。暗く、深く、混沌とした場所へ降りていく。そこでは言葉は必要とされず、感情もあまり必要とされない。やがて、降りていった「私」は、その暗闇の底から何かを手にして戻ってくる。それが何なのかを伝えるために、知りうる言葉を駆使し、様々な試行錯誤を重ねて小説にする。

自分の底から取り出してきた「もの」の形状をそのまま語ったところで、手にされた「もの」を理解したことにはならない。そもそもそれには決まった形がない場合も多い。不定型なその「もの」を形にすること。それは非常に困難で、けれどどうしてもやめられない。私は、目に見えない「もの」を小説を通じて具体化していると同時に、その「もの」の本質を抽象化しようとしているのだ。

そういう意味の「抽象化」の過程では、否応なしに自分という存在を見つめ直すことになる。自分の中の「他者」の批判に晒されることで、その「もの」は物語と化し、普遍性を獲得する。

読者がいるかいないかとは別に、「物語化」という作業そのものに意味があると思うのだ。自己の物語化自体は、意識的にせよ無意識的にせよ、誰しもが様々な方法で行っている。その手段は、ある人にとっては競技であり、ある人にとっては音楽であり、ある人にとっては料理である。それがたまたま、私にとっては「書く」という形をとるのだろう。

このように、今まで小説を「書く」ことで自分を見つめてきた私であったが、この春に文通を始めてからはさらに大きな発見があった。

始まりは、文通相手からの「半端な枚数のセッ

トがいくつも残ってしまっているので、引き出しから溢れそうな便箋を消費しよう」というたわいもない言葉だった。面白そうだ、と思って軽く引き受けたのだが、これがどうやら思いがけない変化を私にもたらしているのである。

手で書きながら考える。自分の考えを整理しながら、それをさらに深めていく。書きながら、自分にも分かっていなかった自分の思考論理・考えの癖・性格傾向が浮かび上がってくる。なんだか不思議な感覚だ。それを繰り返していると、何度も書き直すことになる。もちろん時間もかかる。便箋４枚の手紙を書くのに２～３時間かかることも稀ではない。しかし、その時間をかけて惜しくないと思えるほど、私には面白くて仕方がないのだ。

それに当然だが、手紙には小説とは違って筋書きがない。相手の返信には必ず、思いもよらないような反応が記されている。そのような相手に向かって言葉を紡ごうとすることで、自分一人では思いもよらない言葉が浮かんでくる。書きながら、自分で自分に驚くことが何度もあった。ああ、自分はこんな風に思っていたのか。自分は、こんな論理でこのような行動を取るのか。まだまだ自分について知らないことは多い。そのこと自体を知るだけでも、随分と大きな発見であると思う。

本当の「他者」である文通相手が触媒となって、私が私をより深く理解する手助けになってくれているような感覚だ。小説と文通。違うようで似ている、似ているようで違う、そんな２通りの「書く」を続けていると、この不可解で謎だらけで常に揺らぎ続ける「自分」という存在が、少しだけわかるように思えた。

けれど、それだけではない。２つの「書く」を実践することで、その負の側面――つまり相手を理解し自分を理解してもらうことの困難さと、「書く」ことそのものに含まれる暴力性や攻撃性が、次第にはっきりと浮かび上がってきた。

最初は、「あなたはこう考えるのですね、私はこう思います」と書くたびに湧き上がる違和感だった。本当に私の読みは合っているのだろうか。私の言葉によって相手の思考を決めつけ、不快な気分にさせてはいないだろうか。それに、本当に私の考えは伝わっているのだろうか。いくら言葉を重ねても、わかり合えるとは限らないのではないか。戻ってくる返事を読んで、その思いはまた強くなる。私が書いた相手の考えは少し訂正されており、相手の書いた私の考えは、私自身のものとは少し違っている。

不定型な感情や多面的な人間という存在を、言葉という記号で表象してしまうこと。「あなたは〇〇である」「私は××という考えを持っている」と言い切ってしまうことの怖さ。そこからこぼれたもの、言葉で取りこぼしてしまったものは、その時点でなかったことになってしまう。一義的に、また固定的に捉えることのできない現実を、「書く」ことで固定化してしまっているのではないか。何かを規定していくことは確かに大切なのかもしれないが、だからといってその過程で失われているものを無視していいというわけではない。

ことが自分自身のみに及んでいるならまだ良い。だが、書くことの力――つまり固定化が他者に及んだとき、書くことはもしかすると、容易に「支配すること」に転じるのではないだろうか。

そもそもある物事や現象・相手を理解しようとすることは、それを支配しようとすることと非常に近い領域にあるように感じる。知的好奇心とは、我々が思うような無邪気なものではなく、「対象（の構造・システムなど）を把握したい、いつでも意のままにできる状態にしておきたい」という欲望と同義ではないのか。それは知の力をどう使うかにかかっている、という反論もできる。しかし、その根底に流れる「知りたい」「理解したい」という思いがどこから来ているのかを探ると、やはりどうしても自らの「支配欲」に気づかざるを得ないのだ。

知は力なり、とフランシス＝ベーコンは言った。確かにそうだ。だがそれは諸刃の剣だ。「書く」という行為を、私は今まで純粋に個人的なこと、害のないこと（むしろ自分のためになること）として捉えてきた。だが「書く」ことは、書いたものを知的に固定し、自らの知の枠組みに当てはめることで相手を支配下に置くという危険性を孕む。誰にも見せることがなくとも、「書く」ことそのものによって、損なわれるものがあるのだ。

そのことに気がついた今、それでもなお、私は書かずにはいられないのである。もしも書くことそのものによって何かとてつもなくエゴイスティックなものが生まれるのだとしても、それは生きていくために、自分自身がどうしようもなく背負わねばならないものなのである。それは支配欲かもしれないし、中島敦の『山月記』に出てくるあの怪物かもしれないし、やりたくないことからすぐに逃げ出す、卑怯な自分かもしれない。けれど、自分で自分のことを理解＝支配（コントロール）することもまた、書くことによって可能になるのではないだろうか。

前述の『山月記』を初めて読んだ高校２年生のとき、私は私の中の「怪物」の一部に光が当たったような気がした。名前が付くことで、言葉で表せるようになることで、それはきちんと「存在」するようになったのだ。不定型な影が、実体として形を持つようになった。私はその怪物を、一生心の内に飼いつづける。けれど、「人間は誰でも猛獣使である」（中島敦『山月記』より引用）ということを、私はもう既に知っている。彼がそう書き残してくれたおかげだ。

書かなければ決して伝えられないこともある。ペンは剣よりも強いのである。「伝える」という点において、書かれたものほど強いものはそうない。伝える内容を自分の肉体から切り離すことで、深く、そして客観的に捉えることができる。またより遠くまで、より長期間にわたって伝えることができるのは、我々が「書く」ことを覚えたからだ。

記憶であれ、感情であれ、記録であれ、「伝えたい」という思いを残すこと。いつかなくなってしまうかもしれない、ということも承知の上だからこそ愛おしい。

私にとっての「書く」ことの意味。それは、「自分」とは何かを探ること。自分の弱さから目をそらさないこと。知り得たことと、たくさんの知らないことを明確にすること。私という個人の体験を普遍的な「物語」に落とし込むこと。伝えることの本質的な不可能性と、それでも伝えようとすることの重要性を確認すること――。

こんな言葉ではとても伝えきれない。だからこそ私はきっと、これからも書き続ける。